

『どぶ川学級』にみる教育

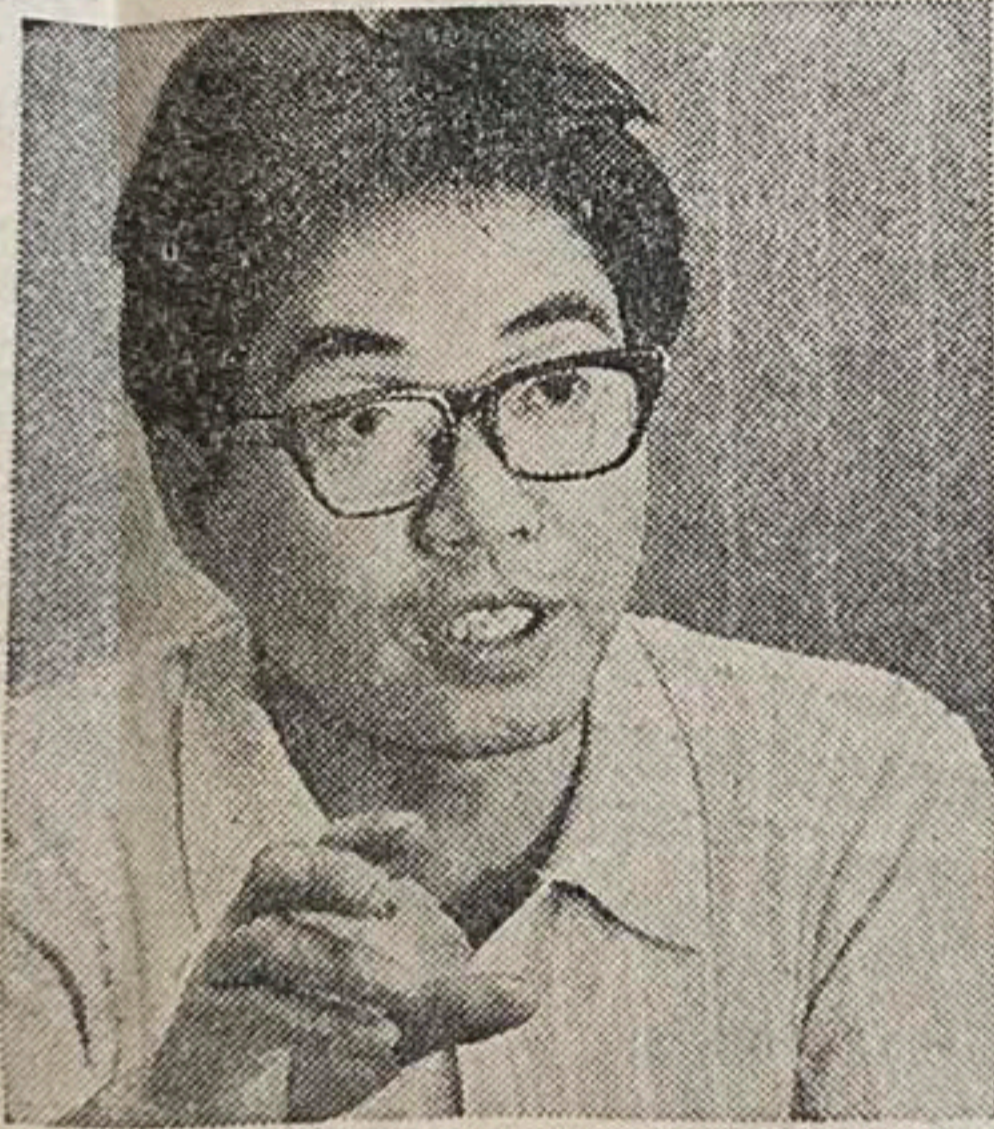
詰め込み主義の現在の学校教育を痛烈に告発した『どぶ川学級』（昭和四十四年発行）は、映画化されたこともあって、教師、学生、母親たちに大きな反響を呼び、二十三部を突破するベストセラーとしていまも読まれている。その第一部『続・どぶ川学級』（労働旬報社刊）が、このほど出版された。著者の須長茂夫さん（言）は教育にはずぶの素人だが、痛々しい疲れ切った子どもたちの現実を鋭く観察している。

家庭



信頼関係こそが必要 意欲にこたえる情熱を

——— 著者 須長茂夫さんの体験から ———



「できない子はいない」と語る須長茂夫さん

一人ひとりを尊重

須長さんは、教える側と教えられる側の信頼関係こそが教育の根本ではないかという。では、いまの学校生活で、教師と子どもたちとの関係はどうか。「教室のなかでは信頼関係があるようだが、生活上の問題には、教師がなかなか

小先生方式を採用

「いつも、どこでも、どんなときでも、子どもは自分が主人公で

「子どもたちとの信頼関係があって初めて、私は子どもの心の内奥にはいれると思うし、子どももまたそれを許してくれるのだ」と思う。真理を基礎に信頼を結ぶ場合もあるが、時には生身の人間同士、たがいの全人格をかけて争われることもある（『続・どぶ川学級』から）

踏み込めないようだ。これでは、子どもたちが求める本当の意味の信頼関係とはいえない」と須長さん。

教師へのさまざまな締めつけがあるとはいえ、子ども一人ひとりを尊重する教育的な情熱があれば、これを克服できるはずだ、ともいう。その自信は、須長

さん自身の体験に支えられている。「どぶ川学級」の生徒が、盗みの疑いで警察から追及されたとき、あくまでその子をかばってやった。そこから次第に信頼が生まれ、生活の問題はもろもろ、学習面でも積極的に相談していきながらになった。「教師は信頼されない」と、子どもたちの本音を引き出すことができない」と須長さんは話す。

「どぶ川学級」でもほとんどの口をきくことになかった女の子が、あきらまじく話した。「学校の先生ってきらい、学級会で話し合おうってしよ。私とN子さんと同じことをいったのに、先生ったら、N子さんのいう通りね」といって、私の名前いわないんだ。私の頭が悪いからだよね、須長さん。この女の子は、他の子どもたちの迷惑にならないようにと、学校でも、「どぶ川学級」でもしゃべらないようにしていたらうのだ。そして、知らず知らず敗北感と、学校や教師への不信を身につけていたのだ。須長さんは「自分が授業の中で主人公にならないことが大きな負担になって、心が屈折してしまっただ。多くの子が、こういう習慣を学校でつくらされている」と指摘する。

この主人公になりたい気持ちこそが「だれにもわかって意欲をもてる授業を保障せよ」という学習権のものはないだろうか。「どぶ川学級」では、そのためにまず、小先生方式をとった。子どもたちが先生のかわりをして、授業を進める方法だ。だれもがうまくなりたいてい、自分の順番が回ってくるまで熱心に勉強したという。「責任をもたせれば意欲を燃やすものだ。現代の子は無気力といわれるが、決してそうではない。それにこの方式で、子どもたちは仲間の発見をしていくのもわかった」

どぶ川学級 日本ロール製造会社の解雇撤回闘争中の三十八年大月、須長茂夫さんが組合員の子どものある中学生の家庭教師になり、学習や生活の指導をしたのが始まり。その後、地域の子たちも参加し、学校でもなく、塾でもない学級をつくった。須長さんは現在、総評全国金庫労組日本ロール製造支部書記長。

自由に発言の空気

また「わかりません」と「できません」を堂々と発言できるように仕向けたことも、子どもたちの意欲をかきたてた。できない

「できない子はいない」と語る須長茂夫さん

「どぶ川学級」でもほとんどの口をきくことになかった女の子が、あきらまじく話した。「学校の先生ってきらい、学級会で話し合おうってしよ。私とN子さんと同じことをいったのに、先生ったら、N子さんのいう通りね」といって、私の名前いわないんだ。私の頭が悪いからだよね、須長さん。この女の子は、他の子どもたちの迷惑にならないようにと、学校でも、「どぶ川学級」でもしゃべらないようにしていたらうのだ。そして、知らず知らず敗北感と、学校や教師への不信を身につけていたのだ。須長さんは「自分が授業の中で主人公にならないことが大きな負担になって、心が屈折してしまっただ。多くの子が、こういう習慣を学校でつくらされている」と指摘する。

この主人公になりたい気持ちこそが「だれにもわかって意欲をもてる授業を保障せよ」という学習権のものはないだろうか。「どぶ川学級」では、そのためにまず、小先生方式をとった。子どもたちが先生のかわりをして、授業を進める方法だ。だれもがうまくなりたいてい、自分の順番が回ってくるまで熱心に勉強したという。「責任をもたせれば意欲を燃やすものだ。現代の子は無気力といわれるが、決してそうではない。それにこの方式で、子どもたちは仲間の発見をしていくのもわかった」